

農業を元気にする「絵本の里」づくり

けんぶち絵本の里を創ろう会

町の活性化をめざし、農業や商工業など、絵本とは無縁だった男たちが中心になって、20年以上にわたって「絵本の里」づくりに取り組んできた。さらに、「絵本の先」にふさわしい、安全・安心な農産物をアピールしようと始めた産直も盛んになるなど、地域農業を元気にしている。



旭川から北へ50kmほど、^{なよろ}名寄盆地の南端に位置する^{けんぶち}剣淵町。人口約3,800、農業を中心としたこの小さな町では、20年余り前から絵本を通じた町づくりが進められてきた。

平成3年にオープンし、5年前に新館が完成した「剣淵町絵本の館」には、絵本や児童書だけで3万5千冊の蔵書が並ぶ。その一角には、障害者福祉施設「西原の里」が運営する喫茶「らくがき」**(右上の写真)**もある。絵本の館は、絵本を楽しむスペースと、原画の収蔵庫や展示ホールなどの機能



▲「絵本の館」の展示ホール

を併せ持つ「絵本の体験館」でもある。これほど多くの絵本作品や原画に接することができる場所は、日本でも数少ない。

その年に国内で出版された絵本のなかから来館者が好きな本を投票して決める「絵本の里大賞」をはじめ、「けんぶち絵本まつり」や原画展、作家との交流などを企画・運営するのは、住民グループの「けんぶち絵本の里を創ろう会(創ろう会)」。「絵本の里」づくりを長くリードし、昨年、設立20周年を迎えた。

絵本との無縁な男たちが立ち上がる

絵本というと、子どもや女性をイメージしがちだが、「創ろう会」は昭和63年、絵本とは縁のなかった若手商店主や農家の男たちが集まって誕生した。

きっかけは、商工会青年部が主催した町づくり講演会で、^{しべつ}士別市在住で銅板画家の^{のぶこ}小池暢子さんが発した、こんな言葉だった。

「日本は経済では一流になったけど、人の心を豊かにする文化や芸術の分野では、まだ遅れている。それでは、いくらお金を持っていても、世界の人たちから軽く見られてしまうのではないか」

この話に共感した男たちが小池さん宅に押しかけ、話し込んだ。さらに、東京の編集者から、「この町なら絵本の原画美術館を建てるのにふさわしい」という意見もあり、「絵本の里」づくりがスタートした。その仕掛け人は、町内で電器店を営み、「創ろう会」の初代事務局長を務めた、故・肥田久宣さんだった。

「農家の若手を仲間に入れたかったのでしょうね。たまたまストーブの修理にやってきた肥田さんは、仕事そっちのけで『絵本の里』づくりについて熱く語ったんです。『酒を飲ませてやるから、お前も手伝え!』と言い残し、工具箱を置き忘れたまま帰ってしまった。その熱意にほだされ、会に参加してみたんです」

稲作と畑作の複合経営を手がける「創ろう会」の会長、下田秀樹さん（48・写真右）は、肥田さんとの出合いを笑顔で振り返る。

下田さんは、当時まだ20代の後半で、最年少のメンバーだった。まずは広報部門を手がけ、イベントなどの看板設置から始めた。その後、事務局長などを経て、平成15年に第4代の会長に就任。8年前から町議会議員も務めており、町づくりに奔走している。

『絵本の里』のイメージにふさわしい作物を消費者にアピールしよう」と平成元年、町づくりを担う農家メンバーが「剣淵・生命を育てる大地の会」を立ち上げ、安全な農産物の産直も始まった。下田さんが組合長を務める「剣淵トマトジュース生産組合」も会の一員である。

「西原の里」の園生らがいち早く手がけていた、野菜の産直の販路を分けあうかたちでスタート。最初の3年間は「西原の里」のなかに事務局が置かれ、職員や園生たちが作業に協力したこともある。売り上げの一部は「絵本の里」づくりに充てられた。

「うちの組合のジュースのラベルやパッケージに絵本作家の作品を使い、『絵本の里』から届けるジュースだとアピールしてきました。『大地の会』のパンフレットの表紙には、その年の『絵本の里大賞』の受賞作品も載せています。ここ数年、それぞれの取り組みの相乗効果が現れてきていますね」（下田さん）



農業があつての町づくり

剣淵町では絵本と農業を柱に、人や自然にやさしい町づくりに向けて、さまざまな活動が積み重ねられてきた。絵本の素人たちが必死になって取り組む姿に共感をいただく人も多く、全国の絵本フ



▲写真は90年代に開催されたセミナー

現在、「大地の会」は生産グループを含め16戸が加入する。会の発足以来、有機栽培の農産物などを食卓に届け、数100万円だった販売高を億単位まで伸ばしている。また、「創ろう会」でも、絵本作家にデザインを依頼して農産物の新しいパッケージを作り、売り上げの一部を活動資金にする準備を始めた。「絵本の里」づくりは農家経済にも寄与している。

さらに、近年では新しい動きも芽生えてきた。農村青年ら10数人でつくる「絵本の里ミーティング」が発足し、音楽活動を中心とした若者たちが集まる場を提供している。町外からミュージシャンを招いて開く「はたけうたコンサート」が、にぎわいを見せるという。

「彼らは『町を元気にしよう』との思いでやっており、ぼくらも応援したい」

と、エールを送る下田さん。

「絵本の館」の運営を切り盛りする、町教育委員会職員で「創ろう会」事務局次長の竹内佳明さん(51)は、こう話す。

「町は金銭的な支援はするけれど、『創ろう会』の活動には口を出しません。町外の来館者から、『剣淵はうらやましいですね』という声が多く寄せられますが、それに甘えず、施設でもっと楽しんでもらえるようにしたい。目標の絵本蔵書数は5万冊。来館者のアドバイスを聞き、いろいろな情報を発信したいですね」

長年にわたる実践を続けてきた下田さんは、この活動がなければ、職業や年代の違う住民同士が交流しあい、一つの目標に向かって進むことはなかっただろう、と実感している。町のイメージアップにも大きく貢献してきたが、取り組みはまだ十分ではないと、あくまで謙虚だ。

「農家経営が厳しさを増し、収益にシビアになっている。町づくりに取り組む一方で農業の利益も上げないと、多くの農家に共感してもらえません。ぼくらはアピールの仕方が下手なので、もっと工夫しながら活動を深めていきたい」

アンが応援団になっているそうだ。

早く原画を提供したり、さまざまなイベントの講師になってくれたりした絵本作家や出版関係者。「剣淵で仕事をしてみたい」と町職員に応募してきた人。町に定住して製作に励む家具職人――。ここ5年間、「絵本の館」の来館者数も町の人口の10倍ほどに当たる年間4万人前後にのぼる。

『絵本の里』づくりを通じて大勢の人と知りあえたことが一番の財産です。お金には代えがたいものがありますよ」

と、下田さんの声が弾む。



「町を元気にしたい」という熱い思いから始まった「絵本の里」づくり。絵本に親しむ住民を増やし、安全で安心な農産物の生産といった、豊かな広がりを育んでいる。

けんぶち絵本の里を創ろう会

絵本を通して心にゆとりと優しさをもって暮らせる町をめざし、昭和 63 年に農家や商店主ら 14 人で設立。現在は主婦や公務員、JA職員、老人クラブの役員らが加わり、会員数は約 200 人。30 団体で構成する「絵本の里づくり実行委員会」や町と協力しあい、イベントの開催や絵本作家との交流などに取り組む。問い合わせ先:上川郡剣淵町緑町 15 番 3 号 「絵本の館」(水曜日休館)

☎0165-34-2624 <http://ehon-yakata.com>